

年 還幸／四 『天皇御還幸／御行列之図』寛政二年 還幸／
五 『新嘗祭神膳行列次第并図』寛政三年 新嘗祭／六 公卿
勅使 『宮川川原祓之図』享和元年 参宮／七 『石清水臨時祭
御再興図画』文化十年 再興／八 『賀茂臨時祭図卷』文化十
一年 再興／九 『桜町殿行幸図』文化十四年 御讓位／十
『光格上皇修学院御幸儀仗図絵卷』文政七年 御幸

【Ⅱ 解説篇】（所 功）

1 安永九年の『御即位次第略解』／2 天明七年の大嘗会御
并風／3 寛政二年の新造内裏への還幸行列絵図／4 寛政三
年の『新嘗祭神膳行列次第并図』／5 享和元年の公卿勅使
『宮川川原祓之図』／6 「石清水臨時祭」の再興と図画／7
『賀茂臨時祭』の成立・変転と祭儀／8 文化十四年の讓位式
と『桜町殿行幸図』／9 『旧儀式図画帖』の光格天皇御讓位
関係図抄／10 文政七年の『光格上皇修学院御幸儀仗図絵卷』
【Ⅲ 参考篇】（モラロジー研究所「皇室関係資料文庫」研究員）
（1）『宸翰英華』所載の光格天皇宸筆／（2）光格天皇宸筆
「勅題・勅点」資料／（3）宮内省編『光格天皇実録』綱文抄
／（4）光格天皇関係の略系図と在在年表／（5）本書の要旨
とその英訳／索引／あとがき

〔解説〕

第一一九代の光格天皇は、後桃園天皇の崩御を受けて、閑院

宮家から九歳で皇位を継承し、安永八年（一七八〇）の即位後
は、三十八年間の在位中も、讓位後の二十三年間も、朝廷の権
威と儀式の復興に努められた天皇であり、平成の天皇（現・上
皇陛下）のご讓位（高齢讓位）が平成三十一年（二〇一九）に
行われるまでは最後に讓位を行われた天皇であった。そのた
め、平成の天皇は平成二十二年以前から宮内庁書陵部の専門家
などに対して、光格天皇の先例の調査を求められ、それを御覧
になったと伝えられる。光格天皇は朝廷の權威の復興というこ
とでは明治以降の近代皇室の前提となるご事績を残され、讓位
の先例という意味では現代の皇室にとっても重要な先例を残さ
れた天皇と言える。

本書は、そのような光格天皇の御事績について、文献・絵画
資料の収集と分析に努められてきた所功教授が、「令和」の
大礼奉祝の意味も含めて出版されたものである。基本的な史料
集である宮内省編『光格天皇実録』（ゆまに書房）、概説的な評
伝である藤田覚『光格天皇 自身を後にし天下万民を先とし』
（ミネルヴァ書房）とともに、光格天皇のご事績を知る上で重
要な研究成果である。

その内容は、Ⅱ 絵図編と「Ⅰ 解説編」で、御即位と大嘗祭
（Ⅰ―Ⅰ、Ⅱ―Ⅰ・Ⅱ）、御元服（Ⅰ―Ⅱ）、寛政内裏への還幸
（Ⅰ―Ⅲ・Ⅳ、Ⅱ―Ⅲ）、神嘉殿での新嘗祭の再興（Ⅰ―Ⅴ、Ⅱ
―Ⅳ）、辛酉の年の神宮への勅使派遣の再興（Ⅰ―Ⅵ、Ⅱ―

5)、石清水・賀茂臨時祭の再興(Ⅰ―7・8、Ⅱ―6・7)、讓位に伴う桜町殿への行幸(Ⅰ―9・10、Ⅱ―8・9)、上皇としての修学院への御幸(Ⅰ―10、Ⅱ―11)についての絵画資料とその儀式に関する関係史料との対照なども含めた重厚な解説が収められているほか、Ⅲ参考編として、帝国学士院編『宸翰英華』(紀元二千六百年奉祝会)にみえる光格天皇の御宸筆と、新たに所功氏により発見・購入された光格天皇宸筆の勅題・勅点の和歌史料、『光格天皇』実録』網文抄と関係年表・系図が掲載されている。

これにより、光格天皇の御生涯の中で行われ、また天皇ご自身により再興された江戸時代後期の朝廷の儀式の実態を具体的に知ることができる。

本書は、近世天皇史・宮廷史のみならず、政治史・文化史・思想史的にも意義ある、基礎的な史資料集と言えよう。

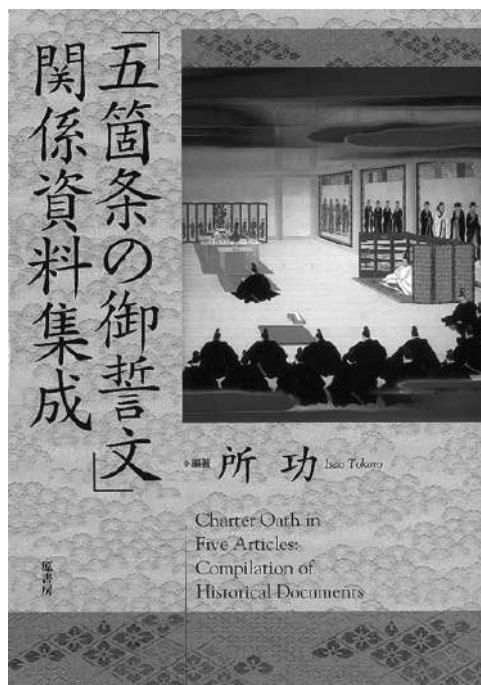
二、『五箇条の御誓文』関係資料集成

〔目次〕

まえがき―「五箇条の御誓文」に学ぶ手懸り

〈関係資料〉

一 宮内庁編『明治天皇紀』抄／二「五条御誓約奉対書」関係資料／付・御誓約奉対署名と『人物写真帖』の対照／三『御誓文大意』と『御宸翰大意』／四 金子堅太郎講述「五箇条御誓



原書房、平成31年、A5版、全248頁

文の由来」／五 笈克彦「五箇条の御誓文の精神」／六 杉浦重剛「五条御誓文」／七「新日本建設に関する詔書」(抄)／八 平泉澄「明治天皇の宸翰」

〈編者解説〉

「五箇条の御誓文」の成立と普及

あとがき―新たな読み解き方

参考文献／人名索引

〔解説〕

「五箇条の御誓文」は慶応四年(一八六八)三月十四日、京

都の紫宸殿において、明治天皇が公卿・諸侯たちを率いて天神地祇に誓うかたちで示された「広く会議を興し、万機公論に決すべし」から始まる五か条の国是であり、「明治維新」により成立した近代国家日本の基本方針・根本理念といふべきものである。

本書は、平成三十年（二〇一八）が「明治」改元から満百五十年となることを記念して、所功教授が「五箇条の御誓文」に関する史料を収集し、解説を付したものである。

その内容としては、五箇条の御誓文の誓約が行われた当日の様子を『明治天皇紀』に基づいて示した（一）上で、明治天皇とともに誓約した貴族・諸侯らの署名（後日の署名も含む）が記された「五条御誓約奉対書」を『大日本維新史料稿本』と京都・東山御文庫の御物の写真帖（宮内公文書館蔵）をもとに翻刻し、そこに署名した人物の一部について、『明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」』に写真が掲載されているものを添付している（二・付）。

さらに、当時五箇条の御誓文の内容を解説したものととして、明治五年（一八七二）に三島神社の萩原正平少宮司が御誓文を普及するために著した『御誓文大意』と明治八年（一八七五）に吉田強介が著した『御宸翰大意』を翻刻している（三）。

また、御誓文の成立過程や意義について、司法大臣・枢密顧問官のほか、『明治天皇紀』編纂局総裁、維新史料編纂会総裁

も務めた金子堅太郎が論じた講演記録（四）に続いて、明治以降の「御誓文」の影響を語るものとして、憲法学者の笈克彦が『帝国憲法の根本義』で解説した「五箇条の御誓文の精神」の抄録（五）、皇太子裕仁親王（昭和天皇）の東宮御学問所御用掛を務めた杉浦重剛の「五条御誓文」御進講記録（六）、昭和二十一年（一九四六）元日に発された「新日本建設に関する詔書」に関する『昭和天皇実録』の抄録（七）、東京帝国大学で国史学を講じた平泉澄の「明治天皇の宸翰」に関する講演記録（八）が収められている。

編者による解説「「五箇条の御誓文」の成立と普及」では「御誓文」の成立過程やその意義について、先行研究や関連史料に基づき、丁寧な解説が加えられ、さらに掲載史料についても個別に説明が行われている。

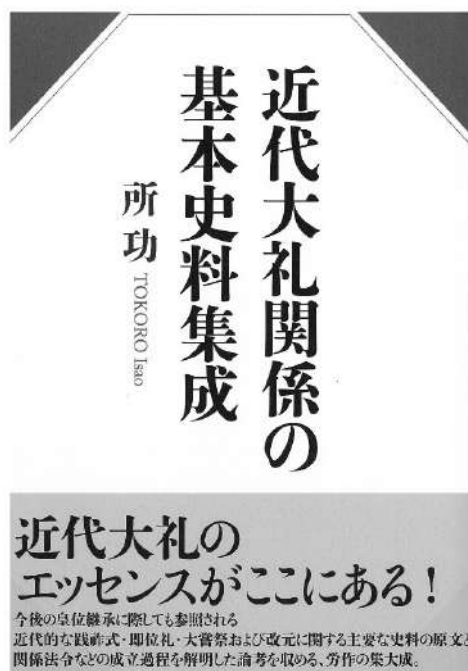
本書を通読することにより、明治天皇のもとで公卿・諸侯がともに誓約を行い、更に国民の中で「御誓文」「御宸翰」が広く知られることで、近代国家日本建設の礎が築かれ、それが後世まで長く影響し続けていたことを知ることができるのである。

三、『近代大礼関係の基本史料集成』

〔目次〕

まえがき

I 明治の『公文録』抄



国書刊行会、平成30年、A5判、全685頁

- 第一章 明治元年の『御即位雑記』／第二章 新式取調掛の即位式絵図／
 第三章 明治四年の『大嘗会雑記』／第四章 東京初例の『大嘗祭図』
 II 近代的な大礼法制
 第五章 伊藤博文『皇室典範義解』抄／第六章 『登極令』の成立過程／第七章 賀茂百樹講義の『登極令大要』
 III 大正・昭和の大礼
 第八章 大正天皇の「踐祚の式」／第九章 大正即位礼の「勅語」と「寿詞」／第十章 御大礼記念会編『御即位大嘗祭絵

巻』／第十一章 高御座の来歴と絵図／第十二章 大正・昭和の「大礼の要旨」／第十三章 大正大礼の概要と『大礼記録』

IV 近代的な年号改元

第十四章 五箇条の御誓文と「明治」改元／第十五章 「大礼記録」の「大正」改元／第十六章 「昭和」の改元と「元号法」あとがき

付一 「登極令」附式／付二 近現代の大礼関係略年表／付三 平成大礼の諸儀式日程／付四 近現代大礼関係の参考文献（抄）／人名索引

〔解説〕

平成三十一年（令和元年）の皇位継承は新しい御代の始まりであるとともに、明治天皇即位以来の「天皇の終身在位」というあり方が大きく変化する瞬間でもあった。本書はそれに先立ち、およそ百五十年前の明治天皇踐祚からはじまる「近代大礼」の歴史を、関連諸史料を集成して振り返ることを可能にしたものである。

まず、明治太政官制期間の基本的な公文書を年代順に編纂した『公文録』のうち、『戊辰御即位雑記』と『付録』に収録される絵図、『辛未大嘗祭雑記』を紹介・解説する。明治維新の混乱が未だ収まらない中、新時代の「大礼」（即位礼・大嘗祭）

を構想・実行した先人の歩みを知ることができる(Ⅰ)。
 続いて、明治の即位礼・大嘗祭の内容を踏まえて行われた大
 礼関係の法制化の歩みとして、『皇室典範』『皇室典範義解』と
 『登極令』関係の史料を紹介・解説し、また国学者で靖国神社
 の宮司を務めた賀茂百樹による解説書『登極令大要』全文が掲
 載されている(Ⅱ)。

さらに『皇室典範』・『登極令』に基づき行われた大正・昭和
 の大礼に関係する史料として、大正の『大礼記録』を中心に、
 当時作成・出版された『御即位大嘗祭絵巻』(大正度)や解説
 書「大礼の要旨」(大正・昭和度)を紹介・解説している
 (Ⅲ)。
 そして「大礼」と共に行われる「改元」について、「明治」・
 「大正」・「昭和」の改元の経緯と、「平成」改元に先んじて行わ
 れた元号法の制定過程が関連史料に基づき、論じられている
 (Ⅳ)。

本書を通読すると、明治・大正・昭和の大礼のいずれにおい
 ても、先例墨守のかたちで行われたことは一度もなく、それぞ
 れ当時の皇室のあり方や社会状況の中で最善のかたちを目指し
 た先人たちの奮闘の成果として行われていたこと、同時に国民
 への理解を進めるための出版活動や、将来の参考となる記録の
 作成、更に次の時代の大礼がいかにあるべきかという意見書の
 提出なども積極的に行われていたことを知ることができる。

本文には図版を多く収録しており、即位礼・大嘗祭の調度・
 物品などを具体的に知ることができるほか、巻末には大礼関係
 の年表、参考文献リスト、詳細な人名索引なども掲載されてお
 り、今後、近代大礼研究を志す研究者のみならず、即位礼・大
 嘗祭・改元に感心を持つ読書人にとっても大変有益な内容であ
 る。

付、『京都の御大礼―即位礼・大嘗祭と宮廷文化のみや び―』

〔目次〕

ようこそ「京都の御大礼」展へ(展覧会実行委員長 所 功)
 皇位継承に伴う儀式と祭祀の来歴(所 功)
 知っておきたい御大礼 用語解説
 御代がわり 儀礼の次第／京都の御大礼マップ／京都御所の御
 大礼マップ
 第一章 即位式図屏風と行幸図屏風／コラム「孝明天皇の賀茂
 社行幸とその絵巻」(所 功)
 第二章 近世の即位式・近代の即位式／コラム「小原家文庫に
 ついて」(皇大助手 大平和典)
 第三章 近世近代の大嘗祭／コラム「大嘗祭と亀卜の技法」
 (京産大准教授・モラロジー研究所客員研究員 久禮旦雄)／
 コラム「鈴鹿家資料」(皇大教授 加茂正典)／コラム「桜町



思文閣出版、平成30年、A4判、全240頁

- 天皇の大嘗祭―「大嘗会拝見私記」について―（皇大助教 佐野真人）
- 第四章 即位式・大嘗会の調度と悠紀主基屏風／コラム「江戸時代の大嘗会悠紀主基屏風」（細見美術館城跡研究員 岡野智子）
- 第五章 大正・昭和の御大札にみる奉祝／コラム「御大札奉祝の品々」（大平和典）
- 第六章 近代京都の発展と御大札／コラム「賀茂両社に耀く真紅の勅使齋文」（所 功）
- 第七章 悠紀主基齋田の人々

特別企画 宮廷文化のみやび―即位礼・紫宸殿模型と宮廷装束のさまざま―（京都造形芸術大教授 五島邦治）

図版解説 分担執筆 浦野綾子（皇大神道博物館学芸員）・岡野智子・大平和典・加茂正典・五島邦治・小林郁（皇大神道研究所助手）・佐野真人・所 功・鳥羽重宏（城南宮宮司）・吉野健一（宮廷文化研究家）

論文 屏風絵に見る靈元上皇の退出行列と東山天皇の即位式（所 功）

「高御座」の来歴を検証する（所 功）

御大札の装束（モラロジー研究所研究員・麗大准教授 橋本富太郎）

大嘗会和歌のことども（京女大名誉教授 八木意知男）

即位と改元（吉野健一）

即位図屏風・行幸図屏風―描かれた天皇儀礼と庶民―（岡野智子）

近世以降の天皇系図／年表／主な参考文献／出品目録

〔解説〕

本書は、「明治」改元（一八六八）から満百五十年、「平成」改元（一九八九）から三十年となることを記念して、平安神宮に近い細見美術館と、隣接する京都市美術館別館（大正天皇即位の際の大饗会場を移転改装した施設）及び京都市勧業会館

「みやこめっせ」を中心に開催（二条城と上賀茂・下鴨神社でも関連イベント）された「京都の御大礼」展」の図録として、所功教授の監修のもとで編集・出版されたものである。

これに先立ち、平成二十八年（二〇一六）には京都の京セラ美術館・城南宮齋館で「近世の宮廷文化展―宮廷大礼文化の風景―」が行われ、ついで平成二十九年（二〇一七）から翌年初頭まで東京の明治神宮文化館で「近代の御大礼と宮廷文化 明治の即位礼と大嘗祭を中心に」が開催されている。本書出版とそれに伴う展覧会はこれらの展覧会に次ぐ総決算といえるべきもので、近世・近代の大礼（即位礼・大嘗祭とそれに伴う諸行事）と宮廷文化に関する諸史資料と研究成果が一同に会したものとなっている。

その内容は、まず第一章では関白豊臣秀吉・將軍徳川家光がそれぞれ後陽成天皇と後水尾天皇を聚楽第・二条城に招いた際の行幸を描いた「御所参内・聚楽第行幸絵図」と「二条城行幸絵図」、靈元天皇の讓位と東山天皇の即位を描いた「東山天皇御即位式・靈元上皇讓位行列図屏風」を中心に、江戸時代前期の京都の天皇・皇室の様相を示している。続いて第二章では小原家文庫資料を中心に、江戸時代の即位式、明治・大正・昭和の即位礼について、第三章では鈴鹿家資料を中心に江戸時代の大嘗祭について明らかにしている。第四章では明和八年（一七七二）と天明七年（一七八七）の「大嘗会和歌御屏風」のほ

か、『文安御即位調度之図』『礼儀類典』など近世即位式の調度に関する絵画資料、第五章では小原家文庫資料を中心に近代即位礼・大嘗祭に関する出版物、第七章では、大嘗祭の神饌に用いられる米と粟を作り、献上する悠紀・主基の齋田に関する写真・絵画などを通じて、当時の宮廷文化や祭祀・行事の諸相を理解し得る。

また「特別企画」では今回の展示に際して作成された江戸時代前期、貞享四年（一六八七）の東山天皇の即位式の十分の一模型とその作成過程が掲載されている。

さらに、図版解説では展示資料に関する詳細な解説が行われ、関連するトピックについてはコラム、史資料の歴史的な意義については専門家による論文も掲載している。これらを通読することで、近世・近代の天皇・皇室を中心とした宮廷文化の諸相を、色鮮やかな図版で掲載された具体的な史資料に基づき理解することが出来る。